

「悪代官のようなイメージだったが、ここまで市民のことを考えていたなんて」

昨秋、宇都宮大で開かれた「Voters Bar in宇都宮」。4人の宇都宮市議と交流した大学生らの感想だ。

若者の政治参加を促すイベント。「普通の主婦だったんです」「落選して浪人中、プールの監視員などもやって」。市議たちは自らのことをぎくばらんに語った。

飲み物を手に、テーブルに分かれる約30人の若者。打ち解けた空気の中、いじめや働き方の問題などで突っ込んだ議論が繰り広げられた。

「堅苦しくないのがポイント」と実行委員会の代表渡辺貴也さん(26)。

今はこうしたイベントを開くが、かつては違った。政治に関心があるかと問われ「政治というとネガティブな印象。よく知らないけ

自ら考え、動き、つくる

社会・政治参加

ど。そんな若者だった。

転機は白鷗大3年の時。

宇都宮市内で開かれた若年層の投票率アップを考える勉強会。「就職面接の話題にもなるかな」。軽い気持ちで向かった会場に、思いがけない光景が広がっていた。

どうすれば投票率を上げられるか。議論を戦わせる同世代。聞けば、近隣県などから集まった参加者の多くは、地元で啓発活動に取り組んでいる、という。政治をテーマに途切れることない会話。お酒を交えた懇親会でも、熱は冷めなかった。

「社会と向き合い、こん

「みんなで社会良く」

なに熱くなれるなんて」

刺激を受け、学生団体「栃つ子」選挙推進プロジェクト(TIEP)を立ち上げて、啓発活動に飛び込んだ。

就職で一度、活動から身を引いたが、人との出会いもあって仕事を辞め、宇都宮市のNPO法人に参加した。市民活動を学ぶ中で、仲間が増え、活動の幅が広がっていった。

NPOでは、古本を換金し若者の活動資金に充てる試み「ホン de チャレンジ」に取り組んだ。

那須烏山市地域雇用創造協議会のスタッフになり開発した照明キット「烏山和紙灯かり」は、厚生労働省

の表彰を受けた。

仲間と話し合い、物や場を、自分たちでつくり上げていく。過程はダイナミックで、やりがいもある。渡

辺さんの原動力だ。敬遠されがちな政治参加だが、主体的に考え、行動するという形は、社会参加と違う、と考える。「みんなで社会を良くしていこう」。引き下げられる選挙権年齢。伝えたいのは敷居の高くない、シンプルなメッセージだ。



県選管主催のサロンで、同世代と、投票率向上策について議論する渡辺貴也さん(11月下旬、県庁)